

高等学校との連携による信州大学の英語教育の システムとカリキュラム改善への取り組み

(中間報告)

橋本 功・宮崎 清孝・下井 一志・藤沢 衛

1. 高校側から見た高校と大学のギャップ

高校3年間で、大学入学試験に備え、かなりの単語力・読解力・文法力そして必要に応じてリスニング力を身につけさせている。それにもかかわらず、「高校での学習成果を土台とした英語力の向上が大学で図られていないのではないのだろうか」という疑問と不満が高校側にある。それは、「大学の英語の授業が「実用的でない」、「退屈だ」と訴える卒業生達のことばかり抱く大学に対する不信感である。結局のところ、高校時代における英語学習の成果が大学側で「入学試験」という形で試されているにもかかわらず、入学後のケアが十分でないために、さらなる英語能力の向上が阻害される場合が多いというのが、大学に入ってから母校を訪れる多くの卒業生達の認識の仕方である。

2. 大生と高校生の英語力の比較：予備調査

平成12年1月に信州大学教育システム研究開発センターと共同で行った予備調査では、人文学部と繊維学部の1年次生に、長野西高校1年生（国際教養科）に課した英語の試験と同じ問題を課した。その内容は読解と簡単な英語論述である。英文は時事的な内容を主としたものである。高校生は授業で扱った教材を期末考査で解答したのに対し、大学生は初見で解答したという点で検査条件は異なるため、公正な比較資料とはいえない。しかしそれにして、大学1年次生と高校1年生とがほとんど同じ得点に終わったこと、個別に見ると高校生より劣るケースもあったこと。これは少なからぬ驚きであった。

3. 高等学校での学習成果が大学で生かされない原因

高校で習得した英語の学習成果が大学で効果的に活かされず、以下のような現象が見られるように思われる。

- 1) 高校から大学にいたる過程で学生の英語力は大幅に落ちる。
- 2) 大学生の英語力は学年が上がるにしたがって低下する。
- 3) 大学での英語の授業の目的と実際の教科内容とではベクトルの方向が異なっている。

これらが原因して、大学生の英語力は社会に通用するに至らないのではないのだろうか。

4. 考えられる可能性

上述のような現象が起きる背景は何であろうか。今後の調査と分析によってこれらの原因を追求することになるが、以下のことが要因として考えられる。

1) 大学における英語授業時間数の不足

大学では多くの学生は週に1～2回の英語の授業を受ける。そして、2年次生、3年次生、4年次生になるにしたがって、英語から遠ざかる学生が増加してくる。一方、学生の実用英語能力養成のためには、「長期にわたる継続的指導や短期集中指導」が有効であることは周知の事実である。信大の英語教育システムはこれに抵触しているように思われる。

2) 「英語教育の目的」と教官の認識の仕方

伝統的に日本の大学における日本人の英語の授業は原書を読むと言うことに重点があった。信州大学では平成7年及び平成10年度のカリキュラムの抜本的改革によって、公式には実用英語にその基軸を移動させた。それにも関わらず英語教育に対する学部間、および、教官間の認識が異なるように思われる。一方、学内における認識の不一致にも関わらず、学生を待ちうける実社会では、国際会議は言うに及ばず、様々な分野で、聞く力・話す力に対する需要が増大しているのである。求められる「英語力」とは何かについて、またどう伸ばすかについて、学部内、および、教官集団の間で議論を行い、英語教育の目的を明確にし、目的達成のための施策を実施すべきであろう。

3) 軽視されるリスニング力

大学入試センター試験でのリスニングテスト導入の消極性。「大学審議会答申」が発表した「外国語を聞く力・話す力の向上」に応えることは、今後信州大学が生き残れる方策の一つであろう。したがって、社会の要請に応える英語をめざすならば入り口の部分も変えていく必要がある。

大学入試に独自のリスニングテストを創出することが難しいならば、既存の検定試験（TOEIC等）の得点をもって判定に加えることはできないだろうか。

4) その他の課題

- (1) 平常の授業時数不足に加え、複数回の長期休業期間があるために、ますます学生が英語から遠ざかる現状を打開するための施策（集中授業等）を今後議論する必要がある。
- (2) 大学教官が研究と教授を両立させることの非効率さを考えれば、英語授業を専門に扱う英語教育プロパーの必要性も議論すべきであろう。
- (3) 英語授業が活性化しない限り、双方向の留学生交流が活発化しない。その悪循環が及ぼす信州大学の将来を見据える知見が必要であろう。
- (4) 英語学力の向上を実質的なものにするためには、単位の積み重ね方式ばかりではなく、一定の英語力を身につけた学生を世に送り出すために、卒業試験制度を一部採用することも議論すべきであろう。

5. 本プロジェクト（高等学校・大学共同研究）の目的

以上の問題点を客観的、具体的視座から議論するために今後、県下の高等学校と連携しながら、以下のデータを収集し、信州大学の活性化に寄与する。

- (1) 高校生と大学生の英語力の違いをできるだけ客観的なデータにより比較する。
- (2) 高校で身につけた英語力は大学でどの程度変化するかを明らかにする。
- (3) リスニング力・文法語法力・表現能力の各分野で高校生と大学生ではどんな差異が見られるか、調査し、英語教育のシステムの改善に資する。
- (4) 高校と大学の連携による大学の活性化の具体的な方策を探る。